

日本個性化教育学会報

第31号

今号は、平成30年3月25日（日）に行われた春季研究会について報告します。
今年度の春季研究会は、移行を直前に控え、新学習指導要領を巡る諸課題を総ざらいで整理すると共に、「カリキュラム・マネジメント」と「資質・能力の育成」という改革の2本柱に関わる実践報告と討論により、おおくの疑問、もやもやの解消をめざしました。



1 テーマ 新学習指導要領を巡る疑問を解消しよう

2 場所 上智大学 2館4階 2-406号室

3 日程

10:30 ~ 12:00	新学習指導要領の諸課題Q & A	奈須正裕（上智大学）
13:00 ~ 13:50	単元・題材一覧表に基づく担任教師のカリキュラム・マネジメント	多田信夫（元草加市立小学校）熊坂由美子（上尾市立大石小学校）
14:00 ~ 14:50	資質・能力の育成を目指した授業づくり：国語科	安達真理子（立教小学校）
15:00 ~ 15:50	資質・能力の育成を目指した授業づくり：算数科	森勇介（聖心女子学院初等科）
15:50 ~ 16:30	全体討論	

<講演>

新学習指導要領の諸課題 Q & A

奈須正裕（上智大学）

講演は、新学習指導要領を巡る5つの想定質問に答える形で進められた。

まず、Q1「今回の改訂の特徴は何ですか？」については、道德の教科化や小学校英語、プログラミングなど新規導入された内容があるものの、在来の教科等については時数も指導事項も基本的には変化がなく、これは戦後初のことである。今回の改訂は「何を教えるか」という「内容」云々ではなく、それを通して「何ができるようになるか」という学力論（「資質・能力」の育成）の方に大きな特徴があり、「主体的・対話的で深い学び」という教育方法の改革も、それに伴うものとして理解することが大切であろう。

Q2「AIの進歩は教育のあり方を変えるのですか？」については、蒸気機関の発明がもたらした第1次産業革命に伴って生まれたのが今日の学校であり、そこでは工場での単純定型労働を支える人材像に見合う学力として「正解」の暗記とその定型的な行使が求められた。IoTやAIがもたらす第4次産業革命は、そのような定型的な仕事をすべて機械化、自動化するから、これからの教育は、そこからは大きく撤退すると共に、価値の判断や創造、未知の複雑な事態への柔軟対応など、人間にしかできないことに注力すべきである。その意味で、AI化の進展はむしろ教育の「人間化」の好機である。

Q3「資質・能力を基盤とした（コンピテンシー・ベースの）学力論って何ですか？」については、従来型の内容中心（コンテンツ・ベース）の学力が人生における成功を予測しないことが、1970年代からの研究で明らかになってきた。したがって、質の高い問題解決に必要な十分な要因としてのコンピテンシーによる学力論の再定義が不可欠である。具体的には、思考力・判断力・表現力等の汎用的認知的スキルを重視すること、感情の自己調整能力や対人関係能力などの非認知的能力を学力に正當に位置づけること、要素的で暗記的な知識から概念的理解や精緻化された知識へと知識の質を高めることが重要である。



Q4「教科等の『見方・考え方』って何ですか？」については、教科等は「対象」（理科における「自然の事物・現象」など）と共に「方法」（理科における「近代科学的方法」など）によっても特徴付けられる。「見方・考え方」とは、この「方法」への自覚と、それに基づく教科等の内容・学力論・指導法の一貫した再編成をもたらす視座である。学校はさまざまな教科等を通して、同じ対象に



対しても、目的に応じて異なるアプローチが可能であり、有効であることを教えている。そして、どのような場合にどの教科のアプローチが有効であるかを判断でき、それを主体的・創造的に自在に繰り出せるようになることが、汎用的能力が育成された状態なのである。そのためにも、まずは各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を子どもたちがしっかりと感得し、自覚することが重要である。

Q5『『内容』を通して『資質・能力』を育成するって、どういうことですか?』については、「資質・能力」が身に付き、自在に駆使できれば、「内容」に関わる細かなことは忘れてもいいと達観することが重要となってくる。つまり、「内容」とは一義的には「資質・能力」育成に必要十分なイグザンプルであり、「習得」それ自体に内在的価値があるとする従来の意義については二義的と見なすのが、「資質・能力」を基盤とした学力論の立場なのである。今回は「内容」の削減はなかったが、「資質・能力」育成を考えると Less is more（少なく教えて豊かに学ぶ）が原則となる。将来的には「内容」の削減が課題となるが、そのためには削減原理の確立が不可欠であり、今後、最重要の検討課題となろう。

<実践発表>

1 単元・題材一覧表に基づく担任教師のカリキュラム・マネジメント

元草加市立栄小学校 多田信夫

上尾市立大石小学校 熊坂由美子

総合的な学習の時間が、ただ単に認識自体をねらいとする総合的な教科ではなく、子どもたちが自分自身や自分の生活の在り方(生き方)を考え、自立的な生活を実践するように成長することをねらいとしている。言い換えれば、子どもの生活経験を基盤とした問題解決活動を通して、現実の社会や自然とのかかわりについて総合的な理解を深めるとともに、それらを基に自分及び自分たちの生活について考え、より良く向上しようと実践する資質や能力を育成することを目標としている。このことを達成するためには、教科の単元編成を総合的な学習の時間の学習内容に関連させ、教科等の知識や技能等が総合的に発揮されるような年間指導計画(カリキュラム)を編成することが大切である。

学習が学級一丸となって問題追究に邁進したときは、多くの時間を必要とする。そのためには、週3時間と言うような、固定的な時間の取り方はそぐわなくなる。どうしても、まとめどりをすることが必要となってくる。そのとき考え出されたのが、総合的な学習の時間を中心とした年間指導計画(単元題材一覧表)と年間時間割である。

従来、年館指導計画(カリキュラム)は、どちらかというと教科書が変わるときに年間指導計画を教科書に準じて変更するだけで、数年使ってきたことに対して何も疑問に思っていなかった。子どもの実態も自分たちの教育実践もそれには反映されていなかったのである。そこで、総合的な学習の時間の内容を整理し、生活科との継続を考え内容系列表を作成し、これを元に総合的な学習の時間の年間指導計画を作成する。これは、総合的な学習の時間の各単元の目標、学習活動、学習内容、評価基準を明確にすることである。次に、単元題材一覧表及び年間時間割の最上位に総合的な学習の時間を位置づけ、各教科、道徳、特別活動との関連を捉え、単元題材の移動を自由に行うようにする。線を引いて明確化することでもかまわない。要は、年度末にそれぞれの記録が残るようにすることであった。

計画はあくまで計画であり、本来的に、カリキュラムは前年度の評価をもとに毎年変更されるべきものである。そのことが繰り返されない限り、地域の実態に合わせ、学校の特色ある教育活動の実施は望むべくもない。4月は計画カリキュラムであり、3月の修了式の日を実施カリキュラムが完成し、それをもとに、再吟味し次年度の計画カリキュラムを作成する。この計画→実施→再吟味→計画のサイクルを繰り返すことによって、毎年更新されその学校独自のカリキュラムが編成され、より子ども中心の教育課程(カリキュラム)が実施されて行くものであると考える。

次に、教科と関連した総合的な学習の時間「食から健康を考える」の実践における担任教師のカリキュラムマネジメントについて現役の熊坂氏に代わる。

総合的な学習の時間の年間計画を確認し、学級の児童の実態、学習環境、地域等を吟味し、単元を作る。その際、単元題材一覧表から、他教科との関連を図るようにする。児童の思考が無理なくつながるよう時期、時間等を考え、大まかに見通す。その際、学年学校を巻き込むように配慮する。具体的には、単元計画を作成する際は、学年の担任で細案を検討する。そのとき内容が他教科との関連するものを抜き出す。本単元では、社会科の「食料生産」の学習における、農・水産業の現状や食物の安全性、日本の自給率等。家庭科のサラダ作りの調理実習。理科のインゲン豆を育てよう。国語の伝え合って考えよう。などがあげられた。また、学年担任が協働で児童の実態調査、地域やゲストティーチャー等の学習環境の確認や児童用のワークシートの作成をした。

学習の実際には、児童にテーマや学習に使える時数をあらかじめ知らせた。大まかな段取りを説明し、細かい段取りは児童自らが取り組むようにした。これらを通して児童は、見通しを持って取り組むことができた。教師は、児童の学習進度に合わせて、学習時間のまとめ取りの時期の検討、変更や関連する他教科の進度の調整を行った。単元計画は絶えず修正して実施された。

単元終了後、振り返り「計画カリキュラム」から「実践カリキュラム」の記録を残し、次年度への申し送りとした。毎年、児童、教師、地域等の実態は変わる。実態に合わせたカリキュラム作りが必要である。



内容等を教科横断的な視点で組み立て実施し、授業後評価し改善することによって次年度の年間指導計画に反映させる。このことは、従来、教務主任以上が考えてくれるという意識を変えることであり、すべての教職員が主体的・協同的にカリキュラムマネジメントに関与することが大切であると考える。

(文責 埼玉 多田信夫)

2 資質・能力の育成を目指した授業づくり：国語科

立教小学校 安達真理子



発表者は、立教小学校の安達真理子氏。発表内容は、安達氏が担任をしている第3学年の学級での国語科の教科書教材「モチモチの木」(光村図書)の授業(8時間扱い)の実践を通した研究である。

本授業実践の研究主題は、以下のように2点掲げられている。

○コンピテンシー(資質・能力)・ベースの国語授業を創造する

「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の育成を基盤とした単元設定を行う。

○appreciation(鑑賞的評価)概念を軸とした文学作品の読みを試み、「学びに向かう力・人間性等」を重点的に育成する。

これは、「見合い・聴き合い・学び合う国語授業の創造—国語科における「主体的・対話的で深い学び」とは—」という主題をもとに安達氏が設定したものである。

2 本研究内容の主旨と特色

安達氏の(国語科の授業の)実践・研究の立場・主旨と、今回の研究会のテーマとの関係は、安達氏の発表資料に述べられている次の主張から明らかにされ、了解されるものと考えられる。

「教材の良さを追求し、子どもの読みの良さを発見し、子ども同士で相互によさを磨き合えばよい。」また、安達氏の発表の特色は、国語科の物語教材における「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、「鑑賞的評価」という、言わば、「国語科に特有の言葉による見方・考え方」に通ずる手立てを取り入れた点にある、とすることができるだろう。

3 協議の概要

協議においては、発表内容に対して「優れた授業実践である」という感想が寄せられた。その理由としては、発表内容の子どもの学習の事実を示されている以下の点に依るところが大きいのと考えられる。

◇単元全体を通じて、子どもたちの学習の質の高まりが明らかにされていること(例えば、教材文の読み取りの深まり・広がり、及び他の児童の読み取りや表現内容についての理解や評価の質の深まり、等)

◇単元全体を通じて、子どもたちの学びに向かう姿に、質的・量的豊かさが感じられる点

4 発表内容について

本発表は、国語科授業実践として、また、今回の研究会のテーマに関する研究としても優れた実践であり、示唆に富んだ研究発表であると思う。ただ、私見ではあるが、国語科教育授業の研究の視点から、以下のような問題意識が生じたので、蛇足ながら付け加えさせて頂きたい。

(1) 安達氏の実践・研究の特色である「鑑賞的評価」についての、国語科教育研究・国語科授業研究の視点からの検討の必要性

特に前回の学習指導要領(中学、高等学校)改訂から盛り込まれた「批評」との関係。また、国語教育研究の立場から、興水実の「文学鑑賞スキル」、或いは小西甚一・川崎寿彦らに始まる「分析批評(ニュー・クリティシズム)」との関係に関する検討

(2) 作品や対象を評価する(価値づけるか)ための観点・手立てとその在り方についての検討の必要性

例えば、文学作品或いは教科書教材の「普遍的価値」と、読者・学習者個人の「読み取り」との関係の在り方についての考察の必要性

(文責 神奈川 池田伊三郎)

3 「資質・能力の育成を目指した授業づくり：算数科」

～ 数学的な見方・考え方を働かせて主体的・対話的で深い学びの授業づくり ～

聖心女子学院 森 勇介

森氏は、授業を面白くすることで子供を惹きつけて、将来的には他の人と関わりながら素敵な未来を創ることのできる子供の育成を目指している。そのためには、その子この子に合った指導法を変えられる力が教師に求められる。例えば、「1m80円のリボンを2.3m買うといくらになるか」という問題。この問題はどの教科書にも出ているが、教科書の導入問題をいかに面白くするか、教師の力量が問われている。式は 80×2.3 となるが、この式になるまでのドラマがたくさんある。教師は「小数点を下ろしてくれればいいのだから簡単だね…」と。学校は問題解決を通して子供に力をつけなければならないのに、「簡単だね。」で終わらせてしまうと、数学的な見方・考え方が育たない。本来なら、「何で整数みたいに計算していいの?」「小数点を下ろすのはなぜ?」など、このように疑問を感じる子供の反応を大切にしたい。「どうして?」「なぜ?」「違う数にしてみると…」などの言葉がたくさん飛び交う授業をしたい。優等生が答えたら、「いいです」と子供たちが答える授業は止めたほうがいい。「本当にそれでいいの」という疑問の目を持つ子



は素晴らしい見方・考え方を持っているのである。似ている考え方、違っているように見えるが共通することはないかと考える統合的な見方など、いつもの授業で何気ない子供の思考が大切であることを実感させるため、算数の見方・考え方の視点で褒め、子供にとって身近になるように様々な見方・考え方をネーミングした。そうすることで子供は無意識のうちに見方・考え方を働かせようとするようになる。授業でよく見かけるのは、問題を解決することを目的にしていること。そうではなく、大切なのは、「この問題文は何故あるのか」「何を学ぶためにあるのか」というねらいを明確にし、子供がそのことに気づき、今日の新しい学びは何なのか、どうして解決できたのかなど筋道立てて振り返ることである。

例えばカレーライスを作る。にんじんやたまねぎ…材料だけでは食べられない。食べるためには調理をする腕が必要である。算数でも九九、計算、測定、作図などの知識・技能だけでは何も解決できない。子供の料理の腕（数学的な見方・考え方）を上達させ、様々な問題を柔軟に解決できる力を育成するには、教師の力量が問われている。



誤答でもたくさんの学びがある。間違えることで馬鹿にされることがあるが、間違えてもいい。そこに学びがあることを実感できる授業にしたい。

「いいですか?」「いいです。」教室でよく見かける光景である。わかっている子だけで進める授業から抜け出ませんか?発表をしている子だけを見るのではなく、発表を聞いている子をよく見ること。発表に対して首をかしげている子が多くなったら一度止めて、理解を得るためにはどうするかみんなで考えることは大切である。

魚の絵を描かせるとみんな左向き。でもある子は右。あつとする。そうか魚は様々な方向に泳ぎことを気づく。世界が変わる。そこに学び合いのよさがあり、そのよさを実感させることが大切である。

子供には様々な発想があり、誤答も認められる学級経営が大切。人との関わりながら素敵な未来を創っていく子供を育てたいと思っている。

(文責 埼玉 諏訪太介)

第 1 1 回 日本個性化教育学会全国大会

開催地：仙台

会場：宮城教育大学

開催日：2018年8月11日(土)～12日(日)

併せて開催の免許更新講習は、選択講習が学会日程を含む8月日～日、必修講習が8月日、日の開催予定です。該当の先生方は、是非この機会をご活用ください。

<事務局への問い合わせ・連絡先>

庶務部長 佐久間 茂和

〒338-0013 埼玉県さいたま市中央区鈴谷 3-9-14-510

TEL 048-678-1681

e-mail sakuma.s@s7.dion.ne.jp

日本個性化教育学会ホームページ <http://koseika.com/>

日本個性化教育学会
平成30年

第31号
4月21日発行

編集責任者
編集

事務局長
広報部

奈須 正裕
多田 信夫